

とくとも、あたらぬ事なるべし、

〔東雅一文〕月ツキ 舊説に日に次の義也といふ、舊事、古事、日本紀等共に、先に生日、神、次生月神と見えて、又其光彩亞日、可以配日なども見えたれば、舊説の如き其義に合へるなるべし、

〔倭訓采都前編十六〕つき 月は盡るの義をもて名とす、西土の書に、以明一盡爲一月といへり、羽州の俗に月末をすどれといふ、夜入月にはひよりそこねやすし、夜出る月にはあらしき空もなほる事あり、是を若月の入そこね、出月の出直りと、船の上にていふ也、

〔日本書紀神代〕伊弉諾尊、伊弉冉尊共議曰、吾已生大八洲國及山川草木、何不生天下之主者歟、於是共生日、神略、中次生月神一書云、月弓尊、月夜見尊、月讀尊、其光彩亞日、可以配日而治、故亦送之于天、

〔曆林問答集上〕釋月第四

或問、月何也、答曰、定象紀云、月、大陰之宗、積而成也、中有獸象、兔陰之類、其兔善走、象陽動也、春秋元命苞云、月、水之精、故内明而氣冷、爲陰精、故體自無光、藉日照之、乃明、猶以臣自無威、假君之勢、乃成其威、月初未對日、故無光、缺、月半而與日相對、故光滿、十六日以後漸缺、亦漸不對日也、又云、月、大陰之位、后妃之象、諸侯、大臣之類、

〔八雲御抄三象上〕月天物をつらつくるならひなり、あまてる月、ますかみますかみ、すかみすかみ、あまてる月、

おとこおとこ、おとこおとこ、これらみな月の名也、月ゆみ、かつらのはな略、橘のたまぬく月、

よよ、よよ、かたわれ、ありあけ月、あかねさすてれる月、夜わたる、ゆふつく、

あかつきやみといふは、夕月のなるは、曉、ひさかたの、夜わたる月と云事、基俊難之、夜字

隔中云々但古今に多也